

# 2018 年度国内研修成果報告書

## 【研修先】

- ・土庄町役場住民環境課人権推進室
- ・土庄町社会福祉協議会
- ・土庄町立大部児童館
- ・子ども食堂

## 【研修日程】

- 8月15日 移動日
- 8月16日 大部児童館にて地域の子どもと交流、社会福祉協議会にて取り組みを聞く
- 8月17日 大部児童館にて地域の子どもと交流・学習指導
- 8月18日 子ども食堂の手伝い、振り返り
- 8月19日 移動日

## 【研修成果】

大部児童館にて地域の子ども達と交流をしたことで『島っ子』の特徴を感じる事が出来た。今まで東京で子どもに関わるボランティアをしてきた経験から、都会の子ども達は知らない人に慣れていているためか、大学生のボランティアにすぐに駆け寄ってきて打ち解けていると考えた。しかし、島の子ども達は知らない人との交流がそもそも少ないせいも、打ち解けるまでに時間を要した。打ち解けた後の反応や接し方は都会の子どもも島の子どもも変わらないが、初対面の警戒心は島の子ども達はとても強いと感じた。そのことから、ボランティアなどで知らない人が島外からやってくる機会が少ないということを実感した。

ボランティアについては社会福祉協議会でも話があがり、ボランティアを行うのはやはり島の人であるということだった。50代～60代の女性がボランティアとしては多いということで、時間のある主婦の方が基本ということである。大学等もなく、ボランティア要因が少ないことが課題になっているということに納得した。そして、高齢化率の高い島ではボランティアの活動先は高齢者福祉になる。社会福祉協議会で説明された取り組みはほとんどが高齢者福祉に関することであり、子どもや若者支援はほとんど行われていないこ

とが分かった。「ボランティアに来てくれる人がいない」という話を島民の方がしていたが、私はボランティアの募集方法が弱いのではないかと考えた。住み込みなど、年単位の長い期間でのボランティアを期待している声もあったが、自治体などで明確に受け入れを提示したほうが学生はボランティアに行きやすいのではないかと思う。そもそも受け容れを提示していないのではボランティアを探す人の目に留まるはずがなく、社会資源獲得の機会を逃しているように考えた。

今回の研修で「島に移住してほしい」という声を多く聞いた。大学進学を機に島を出ていく選択をする若者も多いということから、若い人はやはり求められているのだなと感じた。島に行ったことで島でもそこまで不自由のない生活を送ることができることは分かったが、都会と比べてしまえば不便であることに変わりはないため、「移住したい」と思わせるものがないと駄目なのだと分かった。

社会福祉協議会で聞いた取り組みは先述した通り高齢者福祉に関するものばかりであった。具体的には、①老人給食サービス事業、②土庄ふれあいサービス事業、③日常生活自立支援事業、④生活福祉貸付、⑤生活困窮者自立相談支援事業、⑥香川おもいやりネットワーク事業、⑦緊急自動通報機器貸出、心配ごと相談所開設、赤い羽根共同募金、シルバー人材センター、地域福祉物品無料貸出、老人クラブへの活動支援があるということだった。また、児童福祉領域としてはエンジェルキッチンという活動を行っているということだった。

①老人給食サービス事業は、高齢者の孤独感の解消と地域社会の交流を図るため、概ね70歳以上の高齢者世帯に給食サービスを行っている。600円のお弁当を300円として売っていて、現在は2022食の利用があるとの事であった。

②土庄ふれあいサービス事業は、主に65歳以上の高齢者世帯、障がい者世帯などで介護保険ではサービスを受けられない方に有償でサービスを提供している。車での移動が必須となってくるためか通院・買い物などに送迎サービスが利用されているとのことであった。有償ボランティアが活躍していて、家事型サービスと介助型サービスがあるとのことであった。

③日常生活自立支援事業は、認知症や知的障害、精神障害により自分の判断能力に不安のある方を対象として、個人の尊厳と利用者自身の意思決定を保持しながら、福祉サービスの利用援助・日常的な金銭の管理・重要書類などの預かりサービスを行っている。利用者は20人から半年で29人に増え、急増しているとのことだった。

④生活福祉資金貸付は低所得者世帯・障がい者世帯・高齢者世帯に対し、必要に応じた資金貸付を行うとともに、民生委員を通じて必要な救助指導を行っている。しかし相談をしても実現することは少なく、相談を受けた149件のうち民生委員に話を通すに至ったのはたった3件とのことだった。あくまで『貸付』のため返済の問いたてを行うことはなく、寄付の形で返金してもらっているとのことであった。

⑤生活困窮者自立支援事業では、相談支援員が生活困窮状態にある人の相談に応じている。また土庄フードバンクというものがあり、中身に問題はないが商品にならないような冷

凍うどん等を保存し、その日の食事に困った人に無償で渡すことが出来るようになっていたとのことだった。

⑥香川おもいやりネットワーク事業では、制度のはざまに悩んでいる人々を対象とし、総合相談・地域における権利擁護の推進・居場所づくりに取り組み、ネットワークづくりを行っている。

⑦緊急自動通報機器貸出は、町内の独居老人の緊急時に対処できる体制を整えるために機器の貸し出しを行っている。通報を24時間受け付けられるシステムになっており、徳島県にあるセンターで行っているとのことだった。

土庄社会福祉協議会でよく利用されるのは③日常生活自立支援事業と④生活困窮者私立相談支援事業、⑥香川おもいやりネットワーク事業とのことだった。

エンジェルキッチンでは給食で栄養をまかなっている子ども達が学校の長期休業期間にどうしているのかを懸念し始まったもので、食育・大勢の人間で集まることの良さ・コミュニケーションの場・居場所づくりとして行っているということだった。しかし、食事に困っている児童の特定に繋がることがあってはならないため、来てもらいたい児童に来てもらうことが難しいということであった。小豆島は都会に比べ地域の人々の結びつきが強く、情報が洩れるとすぐに広まってしまうため、子どものプライバシーを守るためにも慎重になってしまうのだと思う。今回私が関わった子ども食堂は内々で声掛けをして集まる形のものであった。参加していた方々はある程度お互いに素性を分かっていた様子であったので、参加人数が多くなかったことを差し引いても「誰が子ども食堂に参加したのか」ということはすぐに分かってしまうのだと考えた。狭く閉鎖的なコミュニティでは考えなくてはならない課題なのだと、実感することができた。

子ども食堂はビーチに面した古民家で行われ、基本的には室外にて立ち食い形式で行われた。子ども達はビーチで砂遊びをしていたり、海に入ったり、鬼ごっこをしたりと楽しそうに遊んでいた。古民家とビーチの間には低めの堤防があり、ビーチに出るための堤防の途切れから海及びビーチは見えるものの、死角に入られてしまえば子ども達の様子は全くと言っていいほど見ることが出来なかった。しかし、子ども食堂のスタッフ（参加していた私達を含め）は料理や準備で手いっぱい、子ども達の付き添いできていた親も室内で涼んだり親同士でおしゃべりをしていたり子ども達を自由に遊ばせていた。そこで、『島っ子』というものを児童館の子ども達との関わりで学んだが、地元の方は子どもが海に入ることに対してとても慣れていることにも気付いた。都会では子ども達がけがをしないようにと過剰に気をつけるが、島では子どもは活発に動き、泳ぎ、けがをするものなのだ。本来あるべき姿やどちらが正しいのかということではないが、地域性というもの活動するうえで前提としてあるものであると感じた。私は子どもを預かるということを考えると、やはり参加した子どもにけがをしてほしくはないと思うが、のびのびと過ごす子どもの姿を見ることが出来て良かったと思う。

子ども食堂には自閉傾向の強い児童が数人参加していた。私は障がいのある児童と関わ

る活動をしているが、島ではそういった活動は少ないという。参加していた障がいを持つ子の母親は「子どもを学校のない休業期間に一日中見てくれる人がほしいが、請けてくれる人がいない。島のコミュニティで障がいを持っていることを理解して見守ってくれるのは助かるが、一日中となると頼むことは出来ないのでサービスを利用したい」と言っていた。障がい支援には個別理解・個別支援が必要であるが、島には障がいをもった子どもが多く存在するうえに、児童に関するサービスは少ない。やっと児童分野に手をつけはじめたと社会福祉協議会で話を聞いたばかりであったので、障がい分野に手を広げるには時間がかかることと考えた。

今回の研修で都会と島の違いというものを強く感じる事が出来た。島を知ることで都会を知ることが出来たと思う。島には人的資源が不足しており、慢性的な高齢化から高齢者分野にばかりサービスを広げざるを得ない状況にある。私たちのような大学生のボランティアを積極的に受け入れる姿勢が島の人々にはあると感じた。しかし、募集をかけなければ人はやってこない。足りない部分の呼び込み、広告方法を考えていく必要があると感じた。

「島の人間はよそ者を嫌う」という私のなかで固定観念化していた考えは、今回の研修でひっくり返すことができた。閉鎖的なコミュニティから、日本全国が流動的に社会資源を共有することができるようになることを考えていかななくてはならないのではないかと思う。